

2 展示

[概要]

歴博は、歴史や文化に関する資料・情報の収集、整理、保存、公開という一連の機能を有する大学共同利用機関であり、特に、研究資源の収集と研究と展示とを有機的に連関させる「博物館型研究統合」というスタイルで、研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については、総合展示および企画展示、特集展示、くらしの植物苑における特別企画、人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げる事ができる。

2019年度の事業として特筆すべき点は、2019年3月19日に開室した総合展示第1室（先史・古代）のリニューアルに続く、第5・第6室リニューアルの本格的な始動である。2025年3月のオープンに向けて、展示資料となる複製品や模型の製作、資料購入が開始された。また展示内容の検討のための資料調査やリニューアル委員会が開催された。続いて、2つめとして、新たな展示形態として、新・特集展示の実施である。第1回目の新・特集展示として「もののけの夏—江戸文化の中の幽霊・妖怪—」（2019年7月30日～9月8日）を開催し、企画展示室B室のみを使用して、企画展示に比して低予算での開催に努めた。展示内容やSNSでの広報の効果もあって、多くの入館者があり、好評を博した展示となった。

企画展示については例年3回開催されているが、上記の新・特集展示を開催したため、2019年度は秋と春の時期での2回の開催となった。どちらも海外から展示資料を借用するなど国際色豊かな展示であった。

「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」（2019年10月29日～12月26日）は、「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」の研究成果に基づき、国立国語研究所との共催で開催し、ハワイにおける日系社会の歴史をテーマにした国境を越えた人の移動に関わる諸問題へのアプローチを、展示のなかに潜在させ、今日的な課題を考える機会となる展示であった。

一方、「昆布とミヨク—潮香るくらしの日韓比較文化誌」（2020年3月17日～5月17日予定）は、基盤研究「海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究」の成果に基づき、韓国国立民俗博物館との共催で国際企画展示として両国会場で開催し、韓国国内の民俗資料を借用し、資料に基づく日韓双方の海をめぐる生活文化の比較を可能とし、両国の歴史と文化に対する相互理解の機会となる展示となった。韓国ではメディアや学会からの注目度は高く、日韓関係の悪化する中で、生活文化から日韓の歴史的関わりを描くことの時宜性も評価された。

特集展示としては以下の6つの展示が開催された。

第3展示室の特集展示『『もの』からみる近世』として、「伝統の朝顔」（2019年7月30日～9月8日）、「描かれた寺社境内」（2019年12月24日～2020年2月2日）、「和宮ゆかりの雛かざり」（2020年2月26日～4月5日予定）を開催した。

第4展示室の特集展示として、「よみがえる地域文化—岐路に立つ共同体のいま—」（2020年7月23日～11月4日）、「石鹸・化粧品の近現代史」（2019年12月3日～2020年5月6日予定）を開催した。

くらしの植物苑では特別企画として、「伝統の桜草」（2019年4月9日～5月6日）、「伝統の朝顔」（2019年7月30日～9月8日）、「伝統の古典菊」（2019年10月29日～11月24日）、「冬の華・サザンカ」（2019年11月26日～2020年1月26日）を開催した。

展示担当 高田 貫太

企画展示等の実施

企画展示

「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」

2019年10月29日～12月26日

「昆布とミヨク—潮香るくらしの日韓比較文化誌」

2020年3月17日～5月17日（予定）

休館中に会期中で中止を決定

新・特集展示

「もののけの夏—江戸文化の中の幽霊・妖怪—」

2019年7月30日～9月8日

くらしの植物苑特別企画

「伝統の桜草」	2019年4月9日～5月6日
「伝統の朝顔」	2019年7月30日～9月8日
「伝統の古典菊」	2019年10月29日～11月24日
「冬の華・サザンカ」	2019年11月26日～2020年1月26日

特集展示

第3展示室 特集展示「もの」からみる近世

「伝統の朝顔」	2019年7月30日～9月8日
「描かれた寺社境内」	2019年12月24日～2020年2月2日
「和宮ゆかりの雛かざり」	2020年2月26日～4月5日（予定） 2月29日から休館

第4展示室 特集展示

「よみがえる地域文化—岐路に立つ共同体のいま—」	2019年7月23日～11月4日
「石鹸・化粧品の新現代史」	2020年12月3日～5月6日（予定） 2月29日から休館し、6月30日～8月30日まで開催

[総合展示リニューアル]

〈総合展示新構築〉

1. 第1室リニューアル委員会

(1) 概要

第1展示室（先史・古代）では、リニューアルオープン後の解説グラフィックやネームプレートの修正に加え、先送り分とした映像コンテンツの制作、リニューアルの記録となる『第1展示室（先史・古代）ができるまで』の製作を行った。また、展示関連の行事として、ギャラリートークや歴博フォーラムの開催の他、リニューアル委員会を開催し、展示評価について話し合った。さらに大学との連携による第1展示室を活用した教育プログラムの推進や学会活動との連携等、展示評価の実施とともにリニューアルオープン後の展示活用を推進した。

歴博フォーラムの開催に先立ち、館外委員を交えたリニューアル委員会を開催し、歴博フォーラムの講演内容の確認及び開室後の展示パネルやキャプション等の修正について館外委員との意見交換を行った。

(2) 館内会議

・第1室リニューアル委員会

全体会議：6月14日

館内委員会議：4月9日

2. 第5室・第6室リニューアル委員会

(1) 概要

第5展示室と第6展示室の一部の展示内容のリニューアルについて検討を進め、大・中・小テーマのタイトル及び展示解説の概要を作成した。第1回リニューアル委員会では、企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を見学し、意見交換を行うとともに、おもにBブロックとCブロックを中心に館内委員からの展示案について、館外委員との意見交換を行い、検討を深めた。第2回リニューアル委員会では、展示設計のプロポーザルに向けた展示構成案について検討を行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染防止対策として、会議の開催を次年度に延期することとなった。

(2) リニューアル委員会（全体会議）

2019年12月8日 第1回全体会議 会場：国立歴史民俗博物館

(3) リニューアル委員会（館内打合せ）

2019年4月23日、5月21日、6月11日、7月9日、9月10日、10月8日、11月29日、12月17日、2020年1月28日、2月14日、3月17日

[企画展示]

「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」

2019年10月29日～12月26日（51日間）

1. 展示趣旨

本展示では、日本からハワイに移住した人々の歴史を、ハワイの近現代史、および日本・ハワイ交流史と併せて展示する。

日本からハワイへの移民は、19世紀のプランテーション労働者としての移住に始まった。その後、日本人移民およびその子孫の数は増え続け、太平洋戦争開戦前にはハワイの全人口の3分の1を占めるまでになった。この間、日本人移民およびその子孫の生業も多様化し、ハワイには日系人社会が形成されていった。

これは、ハワイが経済的に発展を遂げた時代とも重なっていた。その過程で、日本人を含む様々なエスニックグループが流入し、ネイティブハワイアの人口比は減少した。そしてアメリカ合衆国に準州として編入され、軍事的な重要性も増していった。本展示の目的のひとつは、この社会的・政治的な変化とともに、そこに日本人移民とその子孫たちがどのように位置付いたのかをたどることにある。

同時に本展示では、真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争を、ハワイの日系人の歴史、ならびにハワイそのものの歴史のコンテキストにおいて捉え直す。真珠湾攻撃後、ハワイは戒厳令下に置かれるとともに、それまで以上に多くの米軍関係者がハワイに滞在するようになった。そうしたなかで日本人・日系人は、監視の下に置かれ、その一部は敵性外国人として強制収容された一方で、多くの日系二世がアメリカ人として軍務についた。そのなかには、ヨーロッパ戦線へと送られた者、日本語を理解できることから対日戦略に動員され、あるいは日本の占領に動員された者などがあった。太平洋戦争がハワイの戦時社会をどのように規定したのか、アメリカと日本の狭間にあった日本人・日系人と日系人社会、強制収容の実態などをたどることで、戦争の時代を多角的に捉え直していく。

さらに本展示は、太平洋戦争／第二次世界大戦の終結後のハワイについても取り上げる。1940年代後半から50年代にかけての労働運動の盛り上がり、Democratic Revolutionとも呼ばれる政治状況の変化、そしてアメリカ合衆国の第50番目の州になるといった、大きな変化の中に置かれた。日本では、憧れの観光地として注目を浴び、大衆文化の中に根付いていった。冷戦、経済成長といったマクロな状況が刻印されたこの過程において、今日の私たちが知るハワイのイメージと実態の骨格が形成された。この、今日のイメージと実態、そこに至る経過をたどり、「いま」へと接続する。

本展示は、日本で非常によく知られているハワイをめぐる、一般にはあまりクローズアップされない事柄を含めて取り上げていく。ハワイの歴史、日本とハワイの関係はもとより、戦争、多文化の衝突と共生、エスニックマイノリティなど、今日の社会においても重要で普遍的な課題に向き合う契機を提示することを目指した。

2. 展示構成と主な展示資料

展示の構成は、図録に沿っていえば、①ポリネシアン・マイグレーションからハワイ王国へ、②元年者の時代、③「官約移民」のはじまり、④外交史からみる日本とハワイ王国、⑤アメリカ合衆国による併合と「自由移民」時代、⑥コーヒー農園の世界、⑦街のなかの日本人・日系人、⑧日本語学校の教育、⑨移民社会ハワイの形成と変容、⑩太平洋戦争とハワイ、⑪第二次世界大戦後のハワイ：民主化、立州、冷戦、⑫「常夏の楽園」、あこがれのハワイ、とした。

展示コンテンツとして特徴的なのは、次の点である。すなわち、①を設定することで、そもそものハワイのなりたちと、先住民の存在を意識させた上で、日本からハワイへの移民史の展示叙述に入る形を取った。そのなかで、移民史のコンテキストでは手薄になりがちな外交史からのアプローチを盛り込む（④）とともに、朝鮮人や中国人など他のエスニックグループの存在を示すコーナーを設定した（⑨⑩）。また、ハワイへの移民史のなかでは十分に議論されてこなかった、コーヒー生産（⑥）や、1920年代～30年代を中心とする、プランテーションから街に移った日本人・日系人の姿を示すコーナー（⑦）を設定した。国語研が共催機関となっていることから、言語学研究成果を展示するコーナーを設置した（⑧）。さらに、⑨の太平洋戦争をめぐるのは、ハワイにおける敵性外国人の戦時強制収容、日本の占領に関わった日系人兵士の存在、太平洋戦争による家族の分断と葛藤をクローズアップした。戦後のハワイをめぐるのは、冷戦・立州・大衆文化といった、日本の海外旅行自由化前のハワイの様相を意識して示す形を取った（⑪⑫）。

主な展示資料：

移民関係資料（本館蔵）
 大槻幸之助関係資料ほか（海外移住資料館）
 移民関係資料（天理大学附属参考館）
 海沢コレクション（ハワイ大学マノア校）

3. 刊行物

展示図録（A 4版 220頁）
 展示解説シート（A 4版4頁）、広報用ポスター、チラシ

4. 関連行事

内覧会 2019年10月28日（月）、国立歴史民俗博物館
 第420回歴史博講演会「ハワイから見直す近現代：移民・戦争・民主主義」11月9日（土）、国立歴史民俗博物館
 ハワイコーヒーセミナー「コナコーヒーの歴史といま」11月3日（日）、国立歴史民俗博物館
 ギャラリートーク 7回（原山浩介、朝日祥之（国立国語研究所））

5. 成果と課題

●内容面の反省

上記の展示概要で示した展示のねらいとするところは、アンケート結果の記述や、来館した研究者などから得た感想を踏まえると、概ね奏功したといえる。肯定的な部分は、アンケートにも多く記されているのでそちらに譲ることとしたい。一方で、かなり本質的な反省につながる指摘も得ている。それらを踏まえながら、まず内容面での反省をまとめておきたい。

展示のなかで決定的に欠落していたのは、Settler Colonialism、つまり先住民にとっての移民の問題である。これは、しばしば日本人移民の歴史の基調となる、日系人に対する顕彰との衝突がある部分でもある。本展示では、顕彰とSettler Colonialismがいずれも十分に示せておらず、移民をめぐる歴史叙述の困難性を克服できなかったといえる。

アメリカ本土の日系人との関係性を十分に示せなかったという問題もある。特に戦時の日系人兵士をめぐることは、この点は非常に重要なのだが、どのように示すべきなのか、見通しが立たなかった。また、戦後のハワイについては、冷戦と立州を軸に構成したが、そこまでで力尽きてしまい、今日的なハワイの状況へと接続するストーリーを構想できなかった。さらに、ハワイの社会経済史的な実証的叙述も不十分であったと考えている。

これらの問題の解消は、そう簡単ではなく、これまでのハワイの歴史をめぐる研究成果の限界、ないしは研究成果の整理の難しさに起因しており、研究上の課題として引き取るべきものと考えている。

また、これらとは少し別の水準で、二つの反省がある。

ひとつは、ハワイへの「憧れ」に対して十分にアプローチできなかった。観光や音楽を含む文化性への叙述をすることにエネルギーを割けなかったことに起因している。もう一つは、わかりやすい説明にするための工夫が十分ではなく、さらにいくつかの文字の誤りがそのままになってしまったことがあり、これは、運営面の課題とも関係している。

●運営面の感想・反省・課題

本展示は、ハワイ・アメリカ側の関係者にかなりの支援を得ながら実現した。とりわけ、レセプションに対する財政的な支援、一部借用資料の先方負担によるハンドキャリア（スタンフォード大学、ハワイプランテーションビレッジなど）、ツイッターなどを通じた広報面での支援は、本展示を支えるものとなった。また国内でも、UCCによるイベント実施と資料輸送における協力、在京のハワイ州観光局によるセミナー実施などの支援を受けた。予算と人員の不足といった諸事情をかなりフォローしていただいたことについて、感謝の念は絶えない。

しかし他方で、特に国際間の資料輸送を、資料所蔵者側の負担によるハンドキャリアに委ねたことが妥当だったのかどうかは、改めて冷静に考える必要がある。通関におけるトラブル、関税支出をめぐる手続き上のトラブルが発生したほか、そもそも事故等のリスクに対する備えが十分とは言えなかった。予算に制約があるとはいえ、少なくとも今回の方法を安易に前例とするべきではなく、ここでは課題が大きいことを記しておきたい。

また、今回の展示準備・実施の過程は、相当の疲弊を伴うものだったことは述べておきたい。このことは、内容面の反省のうち、わかりやすい解説の設置がうまくいかなかったことや、文字の誤りが残ってしまったことにもつながっている。さらに、「ハワイ」というテーマのポピュラーさに比して、来館者が伸びきらなかった（浸透しきらなかった）こと背景には、展示プロジェクト委員から研究者や関係者などへの働きかけの不足があったと考えている。

これらは、煎じ詰めれば、準備の段取りの悪さと、予算と労働力の制約に起因している。

準備の段取りについていえば、全体として、資料の決定、写真撮影、原稿執筆などを前倒しすべきだったという、ごく当たり前の反省が残る。そのことは十分に踏まえた上で、しかし、今後のために、予算と労働力、そして展示実施の決定時期の問題など、展示を支える条件作りに関わる課題に、責任転嫁との批判を甘受した上で、あえて触れておきたい。

本展示の準備に際しては、過去の反省を踏まえ、資料の情報整理などを早めにスタートさせた。しかし、当初、展示予算によるアルバイトを週一日しか確保できず、その影響を後々まで引きずる結果となった。加えて、他の企画展示の関係から館内展プロの動員が制約されるという不幸もあり、労働力の面でかなりの苦勞をした。背景には、予算面で雇用が難しくなっていることに加え、雇用そのものの総量が制約されているという問題がある。少なくとも後者については、第4期において改善されるべきであり、今回の展示における展プロの異常な労働時間と併せて、組織的な課題として、機構に対して示しておくべきと考える。

ただ、当初「週一日」というアルバイトの少なさは想定外だったとはいえ、予算不足そのものは当初から想定しており、それゆえ、雇用を増やすためのスポンサーを求めることを、初期の段階では考えていた。しかしながら、スポンサーを依頼して交渉をすることに関わる事務作業そのものが困難な状態に陥ったため、これも断念せざるを得なかった。これまであまり考えたことがなかったが、スポンサーを得るためには充実したサポート体制が必要であるということに、本展示の準備を通じて気づかされた。

このほか、率直に言えば、本企画展示の開催を、もう一年早く決定できていれば、という思いは残っている。本展示は、機構在外研究の一環として実施したものであるが、歴博でこの企画展示を実施することができるかどうかの不透明な状態があったため、歴博以外の場所で展示を行う可能性を模索していた時期があった。一概には言えないが、展示開催の決定時期を早めるという選択肢があっても良いように思う。

●その他

本展示は、移民史に関わる諸機関、ハワイの関係機関、移住者の子孫など、関係する団体・個人へのインパクトは大きかったと自負している。ハワイの複数の機関の移民関係資料（図版を含む）が同時に展示されるチャンスは少なく、そこに国内資料を加えて展示できたことは、内容的にも社会的にも画期的だった。国内の関係団体・個人からの注目のほか、数字には表れないが、ハワイからの来館者も少なからずあった。展示の浸透度合いは必ずしも十分でなかったが、こうした社会的な広がりを持つことができたことの意義は大きいと考えている。

以下、今後につながり得る諸団体の動向を、いくつか示しておきたい。

JICA横浜は、本展示の資料借用先であり、相当の協力をいただいたのだが、同時に、本展示を機縁として、11月19日～20日にかけて本館で、JICA主催の研修を実施することができた。この実習は、南米の日系博物館等の関係者が参加し、将来の日本人移民の歴史展示をめぐる相互協力体制を構築することをねらいとするものである。今後、新たなプロジェクトに発展する余地を作ることができた。

周防大島町においては、同地でのハワイ移民に関わるセミナー・展示の実施について話を進めており、2020年度のパネル展示の開催を念頭に、やり取りを行っている。

ハワイ大学ハミルトンライブラリーにおいて本展示の「続編」を実施する可能性や、同ライブラリーと歴博とのさらなるプロジェクトの可能性も話題に上っている。

ひとつひとつの可能性がどれだけ実現に至るかはともかく、こうした波及効果を今後の研究活動・博物館活動に活かしていきたいと考えている。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、産経新聞、東京新聞、読売新聞、千葉日報、中国新聞、公明新聞、北海道新聞、新潟日報、東京経済日報、世界日報、両毛新聞、教育家庭新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

月刊ギャラリー、歴史探訪、週刊新潮、月間ぐるっと千葉 他

【テレビ・ラジオ】

NHK、ケーブルネット296

7. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

【館外】 朝日 祥之 国立国語研究所・准教授
小嶋 茂 海外移住資料館・学芸担当

	坂口 満宏	京都女子大学文学部・教授
	坂梨 健太	龍谷大学農学部・講師
	塩出 浩之	京都大学大学院文学研究科・准教授
	鈴木 啓	Independent Researcher
	高田 智和	国立国語研究所・准教授
	保谷 徹	東京大学史料編纂所・教授
	森田 朋子	中部大学・教授
	森本 豊富	早稲田大学・教授
	山倉 明弘	天理大学・教授
	吉田 亮	同志社大学社会学部・教授
【館内】	◎原山 浩介	本館研究部・准教授
	○吉井 文美	本館研究部・准教授
	大久保純一	本館研究部・教授
	横山百合子	本館研究部・教授
	樋浦 郷子	本館研究部・准教授
	松田 睦彦	本館研究部・准教授

「昆布とミヨクー潮香るくらしの日韓比較文化誌」

2020年3月17日～5月17日（56日間）の予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止

1. 展示趣旨

列島を形成する日本と半島を形成する韓国は、どちらも長い海岸線を持つ。また、日本海（韓国名：東海）はもとより、多島海や遠浅の海といった共通する海洋環境も多く、生息する生物の種類も類似する。さらに、日本と韓国はともに東アジアの文化圏に属し、国家レベル、民衆レベルを問わず、歴史上、現代にいたるまで盛んに交流を重ねてきた。こうした自然的、文化的、歴史的要因を背景として、日韓双方の海と向きあう生活文化には、多くの共通点が見いだされる。その一方で、双方の文化の詳しい観察からは、日韓それぞれにおける独自の技術的發展や文化的展開も確認される。

本展示では、「自然環境と技術」「伝統文化」「歴史的接触」といった視点から、漁法や漁撈具、海産物の嗜好、儀礼食、海をつかさどる神霊への信仰などを比較することで、日韓の海をめぐる生活文化の類似と相違にせまる。こうした試みは、相手の文化に対する理解を深めて尊重をうながすとともに、けっして異文化として切り捨てることのできない近しさを感じる契機を提供することにもなるだろう。

なお、本展示は韓国国立民俗博物館との国際交流事業「日韓地域研究の実践的展開」、共同研究「海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究」、科学研究費補助金基盤研究（B）「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究」の成果を一般に公開するものである。

2. 展示構成と主な展示資料

プロローグ 海のひろがる日常

第1部 海を味わう

味の基本の海産物

儀礼と海産物

第2部 海を生きる

漁師の技

漁師の信仰

第3部 海を越える

東アジアの近代と日韓漁民の接触

漁民の移動と文化の変容

エピローグ 海がつなぐ日本と韓国

主な展示資料：

- 「女人塩辛商人」(ハ・ウン画『風俗画帖』) 1907年 韓国国立民俗博物館蔵
「マイウエー」(龍宮) 20世紀 本館蔵
「鯉のエビス像」複製 年代不詳 本館蔵
「海神図」1960～70年代 韓国国立民俗博物館蔵
「愛媛県越智郡魚島村韓国出漁之状況」複製 1907年 本館蔵
「大漁旗」20世紀 個人蔵 / 「大漁旗」1970年代 韓国国立海洋博物館蔵
「ホセンウォン」(豊漁と安全の神霊) 現代 韓国国立民俗博物館蔵

3. 刊行物

- 展示図録 (A 4 変形版 310頁)
展示解説シート (B 5 版4頁), 広報用ポスター, チラシ

4. 関連行事

- *以下の行事を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。
内覧会 2020年3月16日(月), 国立歴史民俗博物館
第424回歴博講演会「日韓の暮らしを比較する—その意義と可能性」4月11日(土), 国立歴史民俗博物館
ギャラリートーク
日韓の明太子食べくらべ, 5月2日(土), 国立歴史民俗博物館

5. 成果と課題

本展示は韓国国立民俗博物館との共催によるものであり、企画・立案の段階から実際の展示にいたるまで、共同で作業が進められた。残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、歴博での開催は中止となったが、幸いにも、先行して開催された韓国会場での展示は会期(2019年10月2日～2020年2月2日)を全うすることができた。

本展示は、戦後最悪とも言われる日韓関係の中での開催となった。とくに緊張の高まった昨年夏には、韓国会場での開催そのものが危ぶまれたが、韓国民博の熱意により、開催にこぎつけることができた。展示に対する現地メディアや学会からの注目度は高く、日韓関係の悪化する中で、生活文化から日韓の歴史的関わりを描くことの時宜性も評価された。

6. マスコミでの取り上げ**【新聞】**

朝日新聞, 毎日新聞, 読売新聞, 千葉日報, 中国新聞, 上毛新聞, 茨城新聞, 世界日報, 東亜日報 他

【雑誌・ミニコミ誌】

芸術新潮, 旅の手帖, 一個人, 東京人, 散歩の達人, Discover Japan, 月間ぐるっと千葉 他

【テレビ・ラジオ】

NHK

7. 展示プロジェクト委員 (◎: 代表, ○: 副代表)

【館外】	オ・チャンヒョン	本館客員准教授・韓国国立民俗博物館
	キ・リヤン	韓国国立民俗博物館
	ジョン・ヨンハク	韓国国立民俗博物館
	チェ・ウンス	韓国国立民俗博物館
	チェ・ミオク	韓国国立民俗博物館
	ソン・キテ	木浦大学校島嶼文化研究院
	飯田 卓	国立民族学博物館
	磯本 宏紀	徳島県立博物館
	川島 秀一	東北大学災害科学国際研究所
	昆 政明	神奈川大学
	島立 理子	千葉県立中央博物館

	藤永 豪	西南学院大学
【館内】	◎松田 陸彦	本館研究部・准教授
	○小池 淳一	本館研究部・教授
	荒木 和憲	本館研究部・准教授
	川村 清志	本館研究部・准教授
	清武 雄二	本館研究部・准教授
	鈴木 卓治	本館研究部・教授
	西谷 大	本館研究部・教授
	村木 二郎	本館研究部・准教授

[新・特集展示]

「もののけの夏—江戸文化の中の幽霊・妖怪—」

2019年7月30日～9月8日（37日間）

1. 展示趣旨

江戸時代は、妖怪や幽霊などの怪異事象をとりいれた文学や演劇、興業などが流行し、それらを可視化した絵本や錦絵などが大量に生産されている。歌舞伎の怪談物や怪談話には怪異を恐れる気持ちと楽しむ心理が表裏一体となっており、草双紙や妖怪絵本に描かれる妖怪たちは、今日のサブカルチャーにも通じるキャラクター化がなされているとされる。妖怪表現は江戸の文化を読み解くひとつの鍵であるとともに、現代日本文化の背景を考える材料のひとつなのである。

当館には「怪談・妖怪コレクション」をはじめとする国内有数の妖怪、幽霊等の絵巻や錦絵等の資料が蓄積されており、毎年のように国内複数機関の妖怪展等に貸与されてきた。一方、館内利用としては、2001年の企画展示「異界万華鏡」、2009年の機構連携展示「百鬼夜行の世界」以外ではまとまって活用する機会を設けてこなかった。今回の特集展示では、上記の「怪談妖怪関係資料」の他、「見世物関係資料」「錦絵コレクション」などの館蔵資料の中から、江戸時代後期から明治初期における怪異表現に関する資料を約100点選び、博物学的図譜、絵双六などの遊び、寄席や見世物などの興業、あるいは演劇、世相風刺など、江戸文化の多様な諸相の中で提示しようとしたものである。

2. 展示構成と主な展示資料

全体は六章構成をとり、第一章「妖怪研究の流行」では「百鬼夜行図」を核に、博物学的関心の高まりの中で怪談や妖怪図像の収集がさかんにおこなわれていたことを紹介した。第二章「遊びの中の怪異」では、玩具絵や草双紙などに取り入れられた愛敬ある化物たちの姿を紹介した。第三章「歌舞伎の中の怪異」では、化政期間以後の歌舞伎の中で怪談物が流行したことを、「四谷怪談」「東山桜荘子」などを中心に提示した。第四章「盛り場の怪談」では、盛り場における見世物や機関などの娯楽に妖怪・幽霊主題のものが人気を得ていたことを提示した。第五章「武者絵の中の妖怪たち」では、幕末の武者絵の中で妖怪というモチーフが重要な役割を果たしていたことを紹介した。第六章「幕末世相風刺と百鬼夜行」では、歌川国芳の錦絵「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」のヒット以後、幕末・明治初頭にかけて、風刺画が錦絵のジャンルとして急成長を遂げ、それらの中で「百鬼夜行」や土蜘蛛といったモチーフが風刺画のコードとして定着していたことを示した。

主な展示資料：

- 「百鬼夜行図」狩野洞雲益信 貞享元年（1684）以前 本館蔵 F-320-705
- 「新板化物尽」天保（1830～44）頃 本館蔵 F-320-578
- 「東海道四谷怪談 砂村隠亡堀の場」三代歌川豊国 文久元年（1861）本館蔵 F-320-156
- 「柳川豊後大掾浅草奥山に於て興行仕候」歌川芳豊 弘化4年（1847）本館蔵 F-320-4-29
- 「於吹鳥之館直之古狸退治図」月岡芳年 慶応2年（1866）本館蔵 F-320-4-60
- 「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」歌川国芳 天保14（1843）本館蔵 F-320-43

3. 刊行物

展示図録（A4ワイド版 96頁）

展示解説シート（A4版4頁）、広報用ポスター、チラシ

4. 関連行事

内覧会 2019年7月29日（月）、国立歴史民俗博物館

第417回歴博講演会「浮世絵の中の妖怪—表現と機能—」8月10日（土）、国立歴史民俗博物館

ギャラリートーク 2回

5. 成果と課題

館蔵資料を主体に限られた予算内で企画展示に準ずる展示をおこなうという、新特集展として最初の企画であった。展示資料のうち97%は館蔵資料であり、活用されずに収蔵庫でほぼ眠った状態であった資料を相当点数公開することができた。館としては久しぶりのまとまった妖怪展示であり、各種メディアの反応も良好で、期待どおりに多くの来館者を集めることができ、幕末風刺画と妖怪表現との関わりに重点を置いた第6章を中心に、展示内容もおおむね好評であった。デジタル技術で妖怪画像を展示室の入り口、壁面、床に上映・投影する趣向も若い世代を中心に人気があった。

ただ、狭隘な企画展示室Bの中に100点の資料を収容することにはやや無理があった。それに対応するため、各資料の個別解説キャプション以外のパネルは最低限に制限せざるをえず、それを補うため、各資料の解説キャプションの記載内容が増大することとなった。また会期終盤に相当会場内が混雑することもあった。

限られた予算内で章解説の和英並記、資料キャプションにおける資料名の英訳にも取り組み、とくに後者は従来の単純な英訳ではなく、資料に画かれた内容を最低限理解できるものとなることを目指した。ただ当然のことながら字数が増え、やはり小さく読みづらいものとなったことは否めない。

展示図録は資料性を持たせることを意識し、できるだけ図版を大きく、かつ詳しい資料解説を付した。エッセイに関しては館内の民俗学、人類学研究者の執筆を得たため、図録内容にふくらみを持たせることができたが、資料解説は美術史を専攻とする展示代表が単独で執筆したため、きわめて美術史（一部は演劇史的）観点の強いものとなった点は否めない。ただ、第4展示室の尾形家内部に連動する展示「気仙沼のカミと妖怪」を設けていただいたことで、民俗学的成果とのつながりを持たせることができた。

体験コーナーに関しては、来館者自らがイメージする妖怪を画いてもらうコーナーと、インキ浸透印方式で妖怪錦絵の多色刷を体験するコーナー、エントランスに展示サインを背に来館者が各自で写真撮影するコーナーを設けたが、いずれも好評であった。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、東京新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞、産経新聞、千葉日報、両毛新聞、東洋経済日報、The Japan Times、スポーツニッポン、河北新報、信濃毎日新聞、愛媛新聞、埼玉新聞、デーリー東北、新潟日報、徳島新聞、宗教新聞、茨城新聞、高知新聞、しんぶん赤旗、都政新報、下野新聞、日刊自動車新聞、交通毎日新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

家庭画報、サライ、和楽、月刊美術、散歩の達人、ブレン、東京人、歴史探訪、歴史人、日経サイエンス、月刊アートコレクターズ、週刊新潮、週刊現代、Weeklyプレイボーイ、COMIC乱、東京かわら版、書道界、月刊ぐるっと千葉、船橋よみうり 他

【テレビ・ラジオ】

TBSラジオ、J-WAVE、NHK、チバテレビ、ケーブルネット296

7. 展示プロジェクト委員（◎：代表）

◎大久保純一 本館研究部・教授

鈴木 卓司 本館研究部・教授

山田 慎也 本館研究部・教授

〈図録執筆協力〉

川村 清志 本館研究部・准教授

[くらしの植物苑特別企画]

「季節の伝統植物」

春：伝統の桜草	2019年4月9日（火）～5月6日（月・祝）（26日間）
夏：伝統の朝顔	2019年7月30日（火）～9月8日（日）（37日間）
秋：伝統の古典菊	2019年10月29日（火）～11月24日（日）（24日間）
冬：冬の華・サザンカ	2019年11月26日（火）～2020年1月26日（日）（46日間）

1. 展示趣旨

江戸時代に隆盛をきわめた園芸文化は、日本独自の感性と高度な技術により、多種類の植物群にわたっておびただしい品種群を作り出してきた。それらの多くは明治時代以降の西洋園芸の急速な普及によって失われ、かつての園芸技術も消滅しようとしている。この特別企画は、絶滅に瀕している古典園芸植物の系統の探索と維持、生物学的な基礎研究と歴史的な基礎研究の融合を行い、その成果を展示として公開するものである。

2. 展示構成と主な展示品

「季節の伝統植物」では、四季に合わせて4つの園芸植物をとりあげた。

春：江戸時代中頃以降、桜草は野生種の中から変わった花が選り出され、園芸植物として多くの品種が栽培されてきた。当苑では、それらを「伝統の桜草」として2002年より展示してきた。展示方法としては、鉢植えを中心としながら、プランター、地植え、さらには江戸時代後期の観賞法である桜草花壇を再現するなどの工夫をしている。今年度は、「桜草の栽培史」をテーマとして、平安・鎌倉時代から江戸時代中期の文献に残されている桜草を対象に、それが園芸品種化される以前の野生品種を採ってきて生けていた頃の様子をパネルで紹介した。併せて、2007年に収集した近年作出の八重咲きの品種や2010年に収集した野生系の品種、2013年から2015年にかけて収集した現代の新花も展示した。

夏：朝顔は古くから人々に親しまれ、とくに江戸時代以降、文化～天保期、嘉永・安政期、明治・大正期にその花や葉の変化を楽しむ大ブームがあった。これらの朝顔は「変化朝顔」と呼ばれているが、系統を維持するために今日の遺伝学でいう突然変異体を選抜して栽培する、当時では世界で最も先進的な方法が用いられてきた。しかし、この変化朝顔は現在あまり知られておらず、少数の熱心な栽培家と遺伝学教室で細々と維持されている状況である。そこで当苑では、独創的な技術と知識を駆使して創りあげられた変化朝顔を広く一般に知っていただくため、1999年以降生きた歴史資料としてこれを系統維持し、展示をおこなってきた。品種は正木系統44系統、出物系統25系統、大輪系統25系統程度で、その中には当苑で発見された突然変異体の無弁花、台咲孔雀を含む。ほかにもヨーロッパ・北米産の近縁の朝顔を含めた10系統を展示した。とくに今回は、1999年から始まった「伝統の朝顔」展の20周年を記念して、「伝統の朝顔20年の歩み」と題し、くらしの植物苑の特別企画と第3展示室特集展示、歴博フォーラムを合わせてイベントをおこなった。その中で、くらしの植物苑では「新しい朝顔」というテーマで、朝顔の変異が出現した江戸時代から平成までの歴史を追い、その仕組みや鑑別する方法を紹介した。

秋：菊は日本を代表する園芸植物の1つである。平安・鎌倉時代には、日本独自の美意識により、花卉が筆先のようになる「嵯峨菊」や花卉が垂れ下がる「伊勢菊」と呼ばれる独特な花が作り出され、支配者層のなかで不老不死のシンボルとして特権的な地位を保ち、とくに宴や美術工芸品に用いられてきた。それが近世以降になると大衆化し、変化に富んだ園芸種の菊花壇や菊細工の見世物が流行したといわれている。その隆盛に大きく関わったのが、「肥後菊」と「江戸菊」である。そこで、当苑ではこれらの古典菊と呼ばれている「嵯峨菊」、「伊勢菊」、「肥後菊」、「江戸菊」を2000年より展示し、生きた実物資料としての菊を通じてその文化史を紹介してきた。品種は嵯峨菊17品種、伊勢菊12品種（松阪菊3品種を含む）、肥後菊32品種、江戸菊35品種、丁子菊10品種のほかに、奥州菊10品種と当苑で種から育てた実生の新花約50品種を展示した。また、「江戸の和本にみる菊」をテーマとして、重陽の節句と菊花、菊酒における不老長寿のイメージ、『雨月物語』における菊花の契りについて解説したパネルを制作して展示した。

冬：サザンカは日本を原産地とし、ツバキとともに冬枯れの季節に庭を彩る数少ない植物である。サザンカは「サザンカ」、「カンツバキ」、「ハルサザンカ」の3グループに大別されるが、花は10月中頃から翌年2月にかけてサザンカ群、カンツバキ群、ハルサザンカ群の順に咲いていく。これらの品種はハルサザンカを除き、いずれも実生の変り種から選抜されたもので、こうした品種の作り方は、日本の園芸文化の大きな特徴といえる。そこで当苑では、人とサザンカの関わりを文献資料と生きた品種に基づいて考察し、2001年より展示をおこなってきた。育成している品種には、それらの3グループ以外に「江戸サザンカ」や「肥後サザンカ」といった独自のものが含まれて

いる。品種としてはサザンカ群70品種、カンツバキ群43品種、ハルサザンカ群32品種を展示した。また、「昭和と平成のサザンカ」をテーマとし、1932（昭和7）年に刊行された石井勇義の『園芸植物図譜 第4巻』におけるサザンカの図と、戦時中に廃れた後、1960年代にカンツバキやハルサザンカの遺伝子を引き継いだ八重咲や獅子咲の遅咲きのサザンカ、1980年代以降サザンカの栽培熱が徐々に冷めていく中、新たに発表された肥後サザンカの新花について紹介した。

3. 主な行事

特別企画「季節の伝統植物」に関連した観察会

2019年4月27日（土）：第241回「桜草の栽培史」水田大輝（日本大学生物資源科学部）

8月24日（土）：第245回「新しい朝顔」仁田坂英二（九州大学大学院理学研究院）

11月23日（土）：第248回「江戸の和本にみる菊」平野 恵（台東区立中央図書館）

12月21日（土）：第249回「昭和と平成のサザンカ」箱田直紀（恵泉女学園大学名誉教授）

苗の有償頒布〔桜草：2019年4月9日（火）～5月6日（月）、朝顔：6月1日（土）・2日（日）・29日（土）・30日（日）・8月12日（月）～18日（日）、菊：7月6日（土）・7日（日）・20日（土）・21日（日）、サザンカ：11月10日（日）〕

4. 成果と課題

伝統植物を生きた資料として系統維持し、人と植物の関りを文献と実物を用いて考察した結果を展示したことで、植物文化史の理解を一般に広めることができた。また、今年度は、春の「伝統の桜草」で、これまで対象としてきた江戸時代よりも以前の平安・鎌倉時代以降の文献にみえる桜草を対象として、江戸時代までの桜草の栽培の歴史を紹介した。夏の「伝統の朝顔」では、20回目の展示を記念して、各種のイベントでその展示の歩みを振り返るとともに、植物苑の展示では、「新しい朝顔」として、江戸時代から平成までの変化朝顔の栽培の歴史をたどりながらその仕組みや鑑別方法を説明した。秋の「伝統の古典菊」では、江戸時代の和本にみえる菊にまつわる文化や思想など、新たな視点から菊を鑑賞できるように試みた。最後の「冬の華・サザンカ」では、1960年代にカンツバキやハルサザンカの遺伝子を引き継いだ八重咲や獅子咲の遅咲きのサザンカや、新たに発表された肥後サザンカなどの新たな品種について紹介した。そして、各特別企画開催期間中に展示内容とテーマを合わせた観察会を開催することで、植物学と歴史学の基礎研究を融合させた研究成果を公表した。

5. マスコミでの取り上げ

[伝統の桜草] 関連

NHK, チバテレビ, 朝日新聞, 東京新聞, 花卉園芸新聞, フローリスト, 月刊ぐるっと千葉 他

[伝統の朝顔] 関連

NHK, チバテレビ, 朝日新聞, 東京新聞, 読売新聞, 花卉園芸新聞, 報知新聞（スポーツ報知）日本農業新聞, しんぶん赤旗, フローリスト, 趣味の園芸, プランツ&ガーデン, ランドスケープデザイン, 月刊ぐるっと千葉 他

[伝統の古典菊] 関連

朝日新聞, 東京新聞, 千葉日報, 花卉園芸新聞, 趣味の園芸, プランツ&ガーデン, 趣味の山野草, 月刊ぐるっと千葉 他

[冬の華・サザンカ] 関連

チバテレビ, 朝日新聞, 東京新聞, 産経新聞, 花卉園芸新聞, プランツ&ガーデン, 趣味の園芸, 趣味の山野草, いけ花龍生, 私の花生活月, 小原流挿花, 月刊ぐるっと千葉, Weeklyプレイボーイ, サンケイリビング 他

6. 展示プロジェクト（◎：代表、○副代表）

辻 誠一郎	東京大学・非常勤講師	仁田坂英二	九州大学大学院理学研究院
箱田 直紀	恵泉女学園大学・名誉教授	平野 恵	台東区立中央図書館
岩淵 令治	学習院女子大学	水田 大輝	日本大学生物資源科学部
◎青木 隆浩	本館研究部・准教授	日高 薫	本館研究部・教授
○澤田 和人	本館研究部・准教授	川村 清志	本館研究部・准教授
山村 聡	本館管理部・主任		

[特集展示]

第4展示室「よみがえる地域文化—岐路に立つ共同体（コミュニティ）のいま—」

2019年7月23日（火）～11月4日（月）

1. 展示趣旨

東日本大震災以降、日本列島はいつ災害に襲われてもおかしくないという認識が社会の隅々にまで浸透しつつある。また「限界集落」や「地方消滅」という言葉が本来の文脈から離れて独り歩きした背景として、地域社会の高齢化や過疎化が、われわれの生活を根底から揺るがすものとなりつつあることが指摘できよう。そうしたなかで、災害にみまわれたり、高齢化・過疎化が進行したりするなかで列島各地の地域文化と向き合い、その持続と復興に取り組もうとする営みもさまざまなかたちで行われている。ここではそうした地域文化の多様性と特性とを、いわゆる文化財レスキューの過程やその成果を介在させることで見つめ直してみたい。地域社会の文化的な特質を歴史的な深度や民俗の多様性の視点からとらえ、危機を乗り越えていく地域コミュニティの姿をここから見出したい。

なお、この展示は、現在進行中の共同研究「地域における歴史文化研究拠点の構築」の成果の中間報告でもあり、共同研究成果の速報的な報告という性格も併せ持っている。

2. おもな展示資料

- ・尾形家屋根（一部）、尾形栄一日記、寺社の守札類（以上、気仙沼市文化財収蔵庫より借用）
- ・鹿の子とその装束、宝多（以上、宇和島市教育委員会より借用）
- ・『只見本 神皇正統記』（複製）、『陰陽雑書抜書』、『簞篋傳』（以上、只見町教育委員会より借用）
- ・ヘソ玉（樹皮繊維の玉）、マドリ（以上、岩泉町歴史民俗資料館より借用）ほか。

3. 関連行事

- ・展示解説会

日時：2019年7月23日（火）13時30分～

- ・ギャラリートーク

日時：2019年8月10日（土）11時00分～

2019年9月7日（土）11時00分～

2019年10月5日（土）11時00分～

2019年11月2日（土）11時00分～

4. 刊行物

解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

展示趣旨でも述べたように、この展示は歴博が取り組んできた文化財レスキュー事業の成果を、共同研究のなかで検討していく過程で発想されたものであった。その点では比較的長期にわたる調査研究活動の展示への反映という意味合いがあった。そして、個々の資料を通してレスキュー事業の意義と可能性を発信するという点で、一定のインパクトがあり、新聞・テレビなどでも好意的に取り上げられた。災害と対峙した博物館活動の成果を具体的に示すことで、その必要性や実効性を説得力のあるかたちで示すことができたといえる。

図録等は作成しなかったが、歴史系総合誌『歴博』215号（2019年7月）において特集「よみがえる地域文化」を組み、関連する論考・写真等を掲載することができた。同誌は展示場にも配置し、展示資料やパネル以外のかたちでも情報の提供をおこなった。

一方で、展示資料はそれぞれの地域および災害の性格を反映したもので、展示全体としては多様に過ぎたことは否めない。なお、無形的生活文化への配慮も意識したが、その点では映像を提示できたことは効果的であった。

本展示は特集展示の枠組みを越え、他機関からの資料借用、同趣旨の展示（愛媛県立歴史文化博物館）への協力などもおこなった。それらに要する人員と費用は共同研究から対応し、その成果と検討は共同研究にフィードバックされる。こうした展示と共同研究の連環は引き続き柔軟におこなっていく必要がある。

6. マスコミの取り上げ

【テレビ】

ケーブルネット296

【新聞・雑誌】

朝日新聞, 読売新聞, 東京新聞, 毎日新聞, 日本経済新聞, 月間ぐるっと千葉 他

7. 展示プロジェクト (◎: 代表, ○副代表)

◎小池 淳一 本館研究部・教授
川村 清志 本館研究部・准教授
葉山 茂 本館研究部・特任助教

第3展示室「伝統の朝顔」

2019年7月30日(火)～9月8日(日)

1. 展示趣旨

奈良時代に薬として中国大陸より伝えられた朝顔は、江戸時代になると人々に親しまれる花の一つとなった。さらに朝顔自身の突然変異によってできる、葉と花の多様な変化や組み合わせを楽しむ変化朝顔が作り出された。当館では、くらしの植物苑においてこの変化朝顔を系統維持するとともに、1999年より毎年、特別企画「伝統の朝顔」展を開催し、公開してきた。また、本館においても、1999年・2000年には特別企画を、2008年には特集展示を開催して朝顔に関する歴史資料を公開したが、その後も、資料収集につとめている。2019年はくらしの植物苑の特別企画が20周年を迎えたことを記念して、第3展示室「[もの]からみる近世」において、館蔵の朝顔関係資料を一堂で紹介する特集展示を開催した。

本特集展示では、園芸文化としての朝顔の育成のブームと、デザインやイメージとして人々にうけとめられた朝顔、という二つのテーマを設けた。

前者では、園芸文化の展開の中で生まれた奇品ブーム(変わったものを楽しむ文化)の中で朝顔がとりあげられ、文化・文政期(1804～30年)と嘉永・安政期(1848～60年)の二度のブームを迎え、さらに明治20年代から大正期にブームが再燃したことを明らかにした。朝顔図譜・番付・園芸書などを展示し、それぞれのブームの担い手や花の趣味などの違いを示した。

後者では、朝顔をイメージした歌舞伎のキャラクターや朝顔を描いた錦絵、朝顔がデザインされた染織品や漆器など、朝顔にちなんだ絵画や工芸品を展示した。変化朝顔の栽培には、手間・暇・場所と一定の知識が必要で、庶民が自ら栽培できるようなものではなかったため、多くの人々が愛し続けた朝顔は、誰にでもそれとわかるような朝顔であったことを明らかにした。

また、展示室には植物苑の展示に関する写真パネルを多数掲げ、植物苑との連動を図った。

2. おもな展示資料

増補地錦抄 H-1559-12
あさがは叢 貴重書
朝顔三十六花撰 H-1389-4
三都一朝 H-1389-6
変化朝顔図 H-1389-15
助六廓花見時 H-22-1-7-86
朝顔花鳥螺鈿ゲーム箱 H-995-11

3. 関連行事

・展示解説会

日時: 2019年7月30日(火) 13時30分～

・歴博フォーラム

日時: 2019年8月17日(土) 13時00分～

4. 刊行物

解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

以前に開催した特別企画や特集展示よりも、近代の朝顔ブームについて詳しく解説し、江戸時代や現代との異同を示した点が好評を得た。また、変化朝顔の大本となったとされる黑白江南花に関するコーナーや、館蔵のいけ花関係の資料を活用したかざり方に関するコーナーなど、新たに設けたコーナーも、展示の内容をより充実させることにつながっていると評価された。

一方、くらしの植物苑との連動については、紹介の域をこえなかった点に課題が残った。本特集展示との関わりで、実際にくらしの植物苑で注目して欲しい品種に目印をつけるなど、一層の工夫が必要であった。

6. マスコミの取り上げ

【新聞・雑誌】

朝日新聞 他

7. 展示プロジェクト（◎：代表，○副代表）

青木 隆浩	本館研究部・准教授
川村 清志	本館研究部・准教授
◎澤田 和人	本館研究部・准教授
日高 薫	本館研究部・教授
岩淵 令治	学習院女子大学
辻 誠一郎	東京大学・名誉教授
仁田坂英二	九州大学大学院
箱田 直紀	恵泉女学園大学・名誉教授
平野 恵	台東区立中央図書館
水田 大輝	日本大学

第3展示室「描かれた寺社境内」

2019年12月24日（火）～2020年2月2日（日）

1. 展示趣旨

江戸時代、旅や行楽に対する関心の高まりの中で、各地の寺社は多くの参詣客を集める「名所」として認識されていた。安永9年（1780）の『都名所図会』をはじめとして流行した各種の名所図会の中では寺社の精緻な境内図が挿絵の中核をなしており、著名な寺社の中には自ら一枚刷の境内図を版行して参詣客に頒布したところも少なくない。江戸末期には歌川広重らによって名所図会風の俯瞰図を模した錦絵もつくられている。

本企画は館蔵の各種の刷物や絵画作品の中から寺社の境内を俯瞰的かつ精緻に描いたものを選び、それぞれの制作背景や果たした役割について考察するものである。年末から年始の会期ということもあり、絵図の中の寺社に初詣、という含みも持たせたい。

2. おもな展示資料

H-1536	松川龍椿画 京都名所図屏風
H-732	諸国名所図手鑑
H-22-9-1	歌川広重画 東都名所・浅草金龍山
H-677-10	増補江戸名所古跡神社仏閣案内記
H-1415	社寺境内図・名所図

3. 関連行事

・展示解説会

日時：2019年12月24日（火）13時30分～

4. 刊行物

解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

江戸後期の行楽熱や旅への関心の高まりの中で、寺社境内図の需要が拡大し、名所図会、寺社の関与する一枚刷や錦絵など、さまざまな形態をとって流布していく様相を視覚的に提示することができた。2001年度の企画展示「なにが分かるか、社寺境内図」でごく一部しか展示されていなかったH-1415「社寺境内図・名所図」から相当数の資料を拾い上げ、研究資源の活用をはかることができた。また、成田山や鋸山日本寺など千葉の寺院に関する一枚刷も展示することで、千葉県内の観覧者に展示に親しみを持ってもらうことができた。

問題点としては、地方の寺社の門前の書肆が版行した境内図に関して、それぞれの書肆や絵師について十分調べ切れなかったことが挙げられる。

6. マスコミの取り上げ

【テレビ】

ケーブルネット296

【新聞・雑誌】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、日本経済新聞、千葉日報、月刊ぐるっと千葉、船橋よみうり 他

7. 展示プロジェクト

◎大久保純一 本館研究部・教授

小池 淳一 本館研究部・教授

第3展示室「和宮ゆかりの雛かざり」

2020年2月26日（水）～4月5日（日）（新型コロナウイルス感染対策のための休館により2月28日（金）までの会期となった）

1. 展示趣旨

幕末の動乱期、14代将軍徳川家茂に降嫁したことで知られる和宮所用の雛人形・雛道具類（本館所蔵）を公開し、江戸の雛市に関する展示も行った。

上巳（三月三日節）にとりおこなわれる雛祭りの行事は、江戸時代に入ってから広まりをみせ、多くの女性たちの支持を集めた。儀式が定着するにつれ、その装飾は華麗なものとなり、時代時代の流行を取り入れながら、寛永雛、元禄雛、享保雛、次郎左衛門雛、有職雛、古今雛と俗称される多彩な雛人形や、精巧に作られたミニチュアの道具類が生みだされていった。諸記録によれば、皇女和宮も、数多くの雛人形を手もとにおき、上巳にはあちこちと雛人形を贈りあうなど、雛まつりを楽しんだようである。本館所蔵の雛人形・雛道具はその一部をなしていたと考えられるが、有職雛と呼ばれる種類の雛人形と、江戸七澤屋製の各種雛道具、御所人形および三ツ折人形などが含まれ、江戸時代の文化や工芸技術を伝える資料として貴重である。

2. おもな展示資料

内裏雛及雛道具付御所人形（H-40）より

有職雛（直衣雛）

御所人形 孝明天皇遺物など13軀

三ツ折人形 孝明天皇遺物のうち2軀

須磨明石図屏風

狗張子

牡丹唐草文蒔絵雛道具

など約100点

3. 関連行事

なし

4. 刊行物

解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

当館の季節展示として広く知られるようになり、雛人形ブームや有名な皇女和宮所用の雛かざりの展示ということで例年好評な展示であるが、新型コロナウイルス感染拡大により、開幕3日後から臨時休館となりそのまま閉幕を迎える結果となった。休館中の特集展示の様子を伝えるためのYouTube動画を作成し公開した。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

東京新聞、日本教育新聞 他

【雑誌・ミニコミ誌】

日本歴史、月間ぐるっと千葉 他

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296

7. 展示プロジェクト

◎日高 薫 本館研究部・教授

澤田 和人 本館研究部・准教授

【展示プロジェクト委員会】

企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」

1. 展示プロジェクトの趣旨

本展示では、日本からハワイに移住した人々の歴史を、ハワイの近現代史、および日本・ハワイ交流史と併せて展示する。

日本からハワイへの移民は、19世紀のプランテーション労働者としての移住に始まった。その後、日本人移民およびその子孫の数は増え続け、太平洋戦争開戦前にはハワイの全人口の3分の1を占めるまでになった。この間、日本人移民およびその子孫の生業も多様化し、ハワイには日系人社会が形成されていった。

これは、ハワイが経済的に発展を遂げた時代とも重なっていた。その過程で、日本人を含む様々なエスニックグループが流入し、ネイティブハワイアの人口比は減少した。そしてアメリカ合衆国に準州として編入され、軍事的な重要性も増していった。本展示の目的のひとつは、この社会的・政治的な変化とともに、そこに日本人移民とその子孫たちがどのように位置付いたのかをたどることにある。

同時に本展示では、真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争を、ハワイの日系人の歴史、ならびにハワイそのものの歴史のコンテキストにおいて捉え直す。真珠湾攻撃後、ハワイは戒厳令下に置かれるとともに、それまで以上に多くの米軍関係者がハワイに滞在するようになった。そうしたなかで日本人・日系人は、監視の下に置かれ、その一部は敵性外国人として強制収容された一方で、多くの日系二世がアメリカ人として軍務についた。そのなかには、ヨーロッパ戦線へと送られた者、日本語を理解できることから対日戦略に動員され、あるいは日本の占領に動員された者などがあった。太平洋戦争がハワイの戦時社会をどのように規定したのか、アメリカと日本の狭間にあった日本人・日系人と日系人社会、強制収容の実態などをたどることで、戦争の時代を多角的に捉え直していく。

さらに本展示は、太平洋戦争／第二次世界大戦の終結後のハワイについても取り上げる。1940年代後半から50年代にかけての労働運動の盛り上がり、Democratic Revolutionとも呼ばれる政治状況の変化、そしてアメリカ合衆国の第50番目の州になるといった、大きな変化の中に置かれた。日本では、憧れの観光地として注目を浴び、大衆文化の中に根付いていった。冷戦、経済成長といったマクロな状況が刻印されたこの過程において、今日の私たちが知るハワイのイメージと実態の骨格が形成された。この、今日のイメージと実態、そこに至る経過をたどり、「いま」へと接続する。

本展示は、日本で非常によく知られているハワイをめぐる、一般にはあまりクローズアップされない事柄を含めて取り上げていく。ハワイの歴史、日本とハワイの関係はもとより、戦争、多文化の衝突と共生、エスニックマイノリティなど、今日の社会においても重要で普遍的な課題に向き合う契機を提示することを目指したい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2019年10月28日に全体会議を開催し、企画展示の総括を行った。

3. 展示プロジェクト委員 (◎：代表, ○：副代表)

【館外】	朝日 祥之	国立国語研究所・准教授
	小嶋 茂	海外移住資料館・学芸担当
	坂口 満宏	京都女子大学文学部・教授
	坂梨 健太	龍谷大学農学部・講師
	塩出 浩之	京都大学大学院文学研究科・准教授
	鈴木 啓	Independent Researcher
	高田 智和	国立国語研究所・准教授
	保谷 徹	東京大学史料編纂所・教授
	森田 朋子	中部大学・教授
	森本 豊富	早稲田大学・教授
	山倉 明弘	天理大学・教授
	吉田 亮	同志社大学社会学部・教授
【館内】	◎原山 浩介	本館研究部・准教授
	○吉井 文美	本館研究部・准教授
	大久保純一	本館研究部・教授
	横山百合子	本館研究部・教授
	樋浦 郷子	本館研究部・准教授
	松田 睦彦	本館研究部・准教授

企画展示「昆布とミヨクー潮香るくらしの日韓比較文化誌」

1. 展示プロジェクトの趣旨

列島を形成する日本と半島を形成する韓国は、どちらも長い海岸線を持つ。また、日本海（東海）はもとより、多島海や遠浅の海といった共通する海洋環境も多く、生息する生物の種類も類似する。さらに、日本と韓国はともに東アジアの文化圏に属し、国家レベル、民衆レベルを問わず、歴史上、現代にいたるまで盛んに交流を重ねてきた。こうした自然的、文化的、歴史的要因を背景として、日韓双方の海と向きあう生活文化には、多くの共通点が見いだされる。その一方で、双方の文化の詳しい観察からは、日韓それぞれにおける独自の技術的發展や文化的展開も確認される。

本展示では、「自然環境と技術」「伝統文化」「歴史的接触」といった視点から、漁法や漁撈具、海産物の嗜好、儀礼食、海をつかさどる神霊への信仰などを比較することで、日韓の海をめぐる生活文化の類似と相違にせまる。こうした試みは、相手の文化に対する理解を深めて尊重をうながすとともに、けっして異文化として切り捨てることのできない近しさを感じる契機を提供することにもなるだろう。

なお、本展示は韓国国立民俗博物館との国際交流事業「日韓地域研究の実践的展開」、共同研究「海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究」、科学研究費補助金基盤研究（B）「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究」の成果を一般に公開するものである。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

*以下の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

2020年3月16日 全体会議を開催し、企画展示の総括を行う。

3. 展示プロジェクト委員 (◎：代表, ○：副代表)

【館外】	オ・チャンヒョン	本館客員准教授・韓国国立民俗博物館
	キ・リャン	韓国国立民俗博物館
	ジョン・ヨンハク	韓国国立民俗博物館
	チェ・ウンス	韓国国立民俗博物館
	チェ・ミオク	韓国国立民俗博物館
	ソン・キテ	木浦大学校島嶼文化研究院
	飯田 卓	国立民族学博物館
	磯本 宏紀	徳島県立博物館
	川島 秀一	東北大学災害科学国際研究所
	昆 政明	神奈川大学
【館内】	島立 理子	千葉県立中央博物館
	藤永 豪	西南学院大学
	◎松田 陸彦	本館研究部・准教授
	○小池 淳一	本館研究部・教授
	荒木 和憲	本館研究部・准教授
	川村 清志	本館研究部・准教授
	清武 雄二	本館研究部・准教授
	鈴木 卓治	本館研究部・教授
	西谷 大	本館研究部・教授
	村木 二郎	本館研究部・准教授

国際企画展示「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ、取捨選択し、変容させ、みずからの文化として定着をはかる。それは須恵器や鉄器の生産、金工技術、馬匹生産、灌漑技術、炊事道具やカマドなど多岐にわたる。その中で最も頻繁な交渉を重ねた政治体が加耶であった。加耶はひとつの古代国家を形成することはなく、金官加耶、大加耶、小加耶、阿羅加耶などがいくつかの地域政治体がゆるやかな連携をはかっていた。その加耶の実態は、近年の韓国における調査・研究によってかなり具体的に明らかになっている。その最新の姿を墳墓や集落から出土した諸資料から提示し、あわせて倭との交渉様態を描くのが、本展示の趣旨である。

そのために、学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容についての全面的な協力を仰ぐ。中央博では2019年冬に、加耶の実態に関する企画展示を予定している。また、本展示は2020年秋に九州国立博物館にも巡回予定である。こうしたことから、本展示は歴博と韓国国立中央博物館及び九州国立博物館との共催展示としたい。また、総合展示第1室のテーマ4（倭の登場）、テーマ5（倭の前方後円墳と東アジア）の国際交流に関する内容やこれまで進めてきた韓国諸機関との国際交流事業、歴博共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」を展示の学術的な基盤とする。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

第1回	2019年6月12日（水）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース
第2回	2019年7月31日（水）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース
第3回	2019年9月27日（金）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース
第4回	2019年11月6日（水）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース
第5回	2019年12月11日（水）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース
第6回	2020年1月31日（金）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース
第7回	2020年3月19日（木）	国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース

上記会議とは別に、共催館である韓国国立中央博物館及び九州国立博物館と協議を行った。

韓国国立中央博物館との協議及び展示視察 2020年1月17・18日 韓国国立中央博物館

九州国立博物館との協議 2020年1月23日（木）国立歴史民俗博物館 考古研究系共通スペース

3. 展示プロジェクト委員 (◎：代表, ○：副代表)

【館外】	金 東 宇	韓国国立中央博物館考古歴史部・学芸研究官
	小嶋 篤	九州国立博物館展示課・研究員
	白井 克也	九州国立博物館企画課・課長
【館内】	○上野 祥文	本館研究部・准教授
	◎高田 貫太	本館研究部・准教授
	仁藤 敦史	本館研究部・教授
	松木 武彦	本館研究部・教授

企画展示「性差の日本史」

1. 展示プロジェクトの趣旨

歴史学にジェンダー概念が導入されてから四半世紀が経過し、日本史分野でも、歴史に埋もれてきた女性の実態の解明をはじめ、多様な性のあり方や、男女の区分という思考そのものの成立を問うなど、幅広い視野からの研究が進められてきた。

国立歴史民俗博物館では、2016～2018年の3年間、共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」に取り組み、列島社会の歴史をジェンダー視点に立って見直すとともに、「歴史叙述としての展示とジェンダー」にも注目し検討を始めたところである。本企画展示「性差の日本史」は、これらの研究をふまえ、現在の日本社会のジェンダーを考えるうえでも重要な「政治空間と女性」、「くらしと仕事」、「性」をめぐる歴史を振り返るものである。

「政治空間と女性」では、古代から近現代までの中央と地方の政治空間における男女のあり方とその変化に着目し、「くらしと仕事」では、さまざまな生活と労働の場における男女の役割や位置づけの変容を探る。さらに、人間を根底から左右する性について、「性の売買」に焦点を絞り、それぞれの時代の政治・社会やジェンダーの構造と深く結びついて「性の売買」がおこなわれてきたことを示したい。

政治、くらしと仕事、性にとどまらず、ジェンダーは歴史のあらゆる場面で、無意識のうちに人びとを強く捉えてきた。その葛藤のなかで生きた人びとの経験は、驚きと発見に満ちている。本展示は、三つの柱に沿ってその姿を具体的に掘り上げ、歴史に触れる面白さを体感すると同時に、ジェンダーの視点から現代社会を問い直す契機となることをめざすものである。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

- ・2019年4月3日（水）（中世）会場：東京大学史料編纂所
- ・2019年4月27日（土）～28日（日）（全体）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年6月29日（土）（中世）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年8月2日（金）（古代・中世）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年8月20日（火）（近代）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年9月27日（金）（中世）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年10月7日（月）（中世）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年11月8日（金）（古代）会場：国立歴史民俗博物館
- ・2019年11月27日（水）（中世）会場：京都国立博物館
- ・2020年1月31日（金）（中世）会場：国立歴史民俗博物館

3. 展示プロジェクト委員 (◎：代表, ○：副代表)

【館外】	義江 明子	国立歴史民俗博物館・客員教授
	池田 忍	千葉大学大学院人文科学研究院・教授
	久留島典子	東京大学史料編纂所古文書・古記録部・教授
	小林 緑	国立音楽大学・名誉教授
	辻 浩和	川村学園女子大学文学部・准教授
	田中 禎昭	専修大学文学部・教授
	廣川 和花	専修大学文学部・准教授

下江 健太	鳥取県文化財センター発掘事業室・文化財主事兼係長
清家 章	岡山大学大学院社会文化科学研究科・教授
塚田 良道	大正大学文学部歴史学科・教授
伊集院葉子	川村学園女子大学文学部・非常勤講師
小野沢あかね	立教大学大学院文学研究科・教授
人見佐知子	近畿大学文芸学部文化・歴史学科・准教授
加藤千香子	横浜国立大学人間科学部・教授
松本 直子	岡山大学大学院社会文化科学研究科・教授
東村 純子	福井大学国際地域学科・講師
伴瀬 明美	東京大学史料編纂所・准教授
水野 僚子	日本女子大学人間社会学部・准教授
柳谷 慶子	東北学院大学文学部・教授
福田 千鶴	九州大学基幹教育院・教授
森下 徹	山口大学教育学部・教授
村 和明	東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
長 志珠絵	神戸大学大学院国際文化学研究科・教授
松沢 裕作	慶應義塾大学経済学部・准教授
【館内】 ◎横山百合子	本館研究部・教授
○小島 道裕	本館研究部・教授
仁藤 敦史	本館研究部・教授
三上 喜孝	本館研究部・教授
内田 順子	本館研究部・教授

新・特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―」

1. 展示プロジェクトの趣旨

世界史上の大航海時代より以前、早くも14世紀代から東アジア海域世界では活発な交易がおこなわれていた。それを牽引した琉球は、単なる受動的な中継貿易国家ではなく、諸外国と複雑な外交交渉をおこない、積極的な交易活動を展開した海洋国家であった。その活動過程で、言語も習俗も異なる八重山・宮古や奄美に侵攻し、在地社会を大きく変化させた。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。本展示では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝國的側面に視点を据え、宮古・八重山や奄美といった周辺地域から琉球を捉え直す。

なお、本展示は平成27～29年度国立歴史民俗博物館基盤研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」（研究代表者：村木二郎）の成果公開でもある。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2019年6月24日（月） 令和元年度第1回展示プロジェクト会議

村木二郎 展示場図面に基づいた展示構成案の提示、展示タイトル案の提示、それに対する議論

2019年12月9日（月） 令和元年度第2回展示プロジェクト会議

村木二郎 展示構成案全体の提示

黒嶋 敏 テーマⅤ展示案の提示

渡辺美季 テーマⅥ展示案の提示

それに対する議論、展示タイトルの確定

※関連する調査・研究会については科研費のページを参照

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

【館外】	新垣 力	沖縄県立埋蔵文化財センター・主任専門員
	池田 榮史	琉球大学国際地域創造学部・教授
	池谷 初恵	伊豆の国市教育委員会・文化財調査員
	岩元 康成	始良市教育委員会・主事

	小野 正敏	国立歴史民俗博物館・名誉教授
	久貝 弥嗣	宮古島市教育委員会・主事
	黒嶋 敏	東京大学史料編纂所・准教授
	小出麻友美	千葉県立中央博物館・研究員
	佐々木健策	小田原城総合管理事務所・係長
	山本 正昭	沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員
【館内】	○荒木 和憲	本館研究部・准教授
	齋藤 努	本館研究部・教授
	田中 大喜	本館研究部・准教授
	松田 睦彦	本館研究部・准教授
	◎村木 二郎	本館研究部・准教授

企画展示「〈教え〉と〈学び〉の日本近代史（仮称）」

1. 展示プロジェクトの趣旨

基幹研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」（2018～2020年度）の成果を展示という形で示すとともに、総合展示第5室のリニューアルを見越したのもでもある。学知・教育・宗教といった文化の側面から近代国民国家の形成過程を描くことをめざすが、縦割りの分野史ではなく政治・経済等をも広く含み込んだ総体的な歴史を提示したい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

基幹研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」の研究会を兼ねた形で展示プロジェクト委員会を開催した。詳細は共同研究のページを参照。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

【館外】	石居 人也	一橋大学大学院社会学研究科・准教授
	小川 正人	北海道博物館・学芸副館長
	落合 功	青山学院大学経済学部・教授
	木村 直也	立教大学文学部・特任教授
	北原かな子	青森中央学院大学・教授
	塩原 佳典	畿央大学教育学部・准教授
	高木 博志	京都大学人文科学研究所・教授
	谷本 晃久	北海道大学大学院文学研究科・教授
	保谷 徹	東京大学史料編纂所・教授
【館内】	◎樋口 雄彦	研究部歴史研究系・教授
	○樋浦 郷子	研究部・准教授
	福岡万里子	研究部歴史研究系・准教授
	小瀬戸恵美	研究部情報資料研究系・准教授

企画展示「中世武士団—領主としての実像—（仮称）」

1. 展示プロジェクトの趣旨

2016～18年度基幹研究Aブランチ「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」（代表：田中大喜）の成果をもとに、中世を通じた武士の領主支配の展開の具体相を展示する。2010年度企画展示「武士とはなにか」は、中世～近世社会における武士の実態・イメージの変遷を展示したが、武士の領主としての実態については扱わなかった。本企画展示では、時期を中世に絞るものの、これを正面から取り上げるものとなる。また、中世武士の領主支配は、列島中を繋ぐ海上交通と不可分の関係にあったことから、本企画展示には、2016～18年度基幹研究Bブランチ「中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」（代表：荒木和憲）の成果の一部も組み込んで構成

する。本企画展示の内容と経験は、総合展示第2室のリニューアルに活かす予定である。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

6月に第1回展示プロジェクト委員会を開催した。本企画展示の趣旨・全体構成・展示資料について検討・議論した。また、展示候補となる館蔵資料を熟覧した。3月に第2回展示プロジェクト委員会を開催する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大予防のために、来年度へ延期することになった。

3. 展示プロジェクト委員 (◎：代表, ○：副代表)

【館外】	小野 正敏	国立歴史民俗博物館・名誉教授	
	高木 徳郎	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	
	田久保佳寛	小城市教育委員会文化課・係長	
	出口 晶子	甲南大学文学部・教授	
	中司 健一	益田市歴史文化研究センター・主任	
	西田 友広	東京大学史料編纂所・准教授	
	水澤 幸一	胎内市農林水産課・参事	
	湯浅 治久	専修大学文学部・教授	
	【館内】	○荒木 和憲	本館研究部・准教授
		小島 道裕	本館研究部・教授
後藤 真		本館研究部・准教授	
鈴木 卓治		本館研究部・教授	
◎田中 大喜		本館研究部・准教授	
松田 睦彦		本館研究部・准教授	
村木 二郎		本館研究部・准教授	